

しさがあり、決して安易に考えられるものでない。特に新設の大学出版部にとっては、諸々の出版業務や販路の確保などさまざまな課題を背負っていて、専門家の知識を必要とする場面も多い。さらに、独自にこのような課題を解決しようとする、資金や組織などの不足のために大変難しい側面がある。そこで、同じような立場にある大学出版部が連携することによって、課題解決を図るための組織として本会の設立を提案する次第である。また、本会を通じて大学出版に関わるさまざまな問題を共有することによって、互いによりよい大学出版部にしてゆく道もたどりやすくなるであろう。新設の大学出版部も、いずれは有限責任中間法人大学出版部協会に所属し、日本の出版文化の発展に寄与するよう努力することも重要な責務のひとつであるが、実はそこに至るまでの過程においてこそ、連携・協力の必要性が重要である。生まれたばかりの大学出版部が有限責任中間法人大学出版部協会の一員となるまでに成長していく、その一步一步の歩みのなかに、またその歩みを見つめ互いに協力・支援し合う関係のなかにこそ本会の必要性のすべてが見えてくるものと確信する。

新刊行物のご紹介： 双六の復刻

この度、東京学芸大学附属図書館所蔵の双六コレクションの中から、教育に関係の深い二点の絵双六が、国立大学法人東京学芸大学、辟雅会（東京学芸大学全国同窓会）、および東京学芸大学出版会の三者による共同事業として、復刻・刊行されました。本刊行物は、新しいタイプの出版物として注目を集めるであろうことはもとより、価値の高い教育史学の資料としても重要視されることでしょう。双六コレクションは全部で100点以上あり、シリーズ化の可能性もありえます。（制作は双六復刻事業実行委員会、販売価格はそれぞれ1,260円）



ご案内：『東京 師範学校生活史研究』好評発売中！ブックレットも好調です！！

2005年7月に出版された陣内 靖彦先生（本学教育学講座）著の『東京 師範学校生活史研究』（ISBN 4-901665-04-9 ¥3,990）が好評を博しており、全国の書店、図書館、研究者の方々からの照会が続いております。学術書らしく息の長い著作となりそうです。また小林 正幸先生（本学教育実践研究支援センター）によるブックレット『不登校児童生徒への再登校援助 教育問題解消のための教育を求めて』も好調です。ブックレットに関しては、大石 学先生（本学人文科学講座）による著作も完成間近であり、その後も続刊が予定されております。御執筆の先生方に感謝申し上げますと共に、今後の出版活動にもご期待頂きたいようお願い申し上げます。

お願い： 出版会会費納入に関して 東京学芸大学出版会は、主に皆さまからの会費により運営されております。会員の方で、まだ年度会費を納入されていない方は、至急の納入を宜しくお願い申し上げます。また非会員の方におかれましては、ご加入をご検討頂けますと幸甚至極に存じます。なお納入先郵便振替口座は、以下の通りです。
 口座名：東京学芸大学出版会、口座番号：00190-5-13873（寄付金納付の場合は赤枠用紙、会費納入の場合は青枠用紙をご使用下さい）です。

編集後記： 第5巻第1号(通巻第9号)をお届けします。諸般の事情により、発行が遅れる状況が続いており、申し訳ございません。しかし今号も、お二人の先生方から渾身のご寄稿を賜り、心より感謝申し上げます。まだまだ学内的にも認証の度合いが高いとは言えない出版会ではありますが、配布やWeb頁などへのアップにより、お一人でも多くの方にその存在をお認め頂き、ご理解とご支援を賜れるようになることを、心よりお願いする次第でございます。（5）

東京学芸大学出版会<会報>プレスニュース 第5巻第1号(通巻第9号) 2006年1月31日発行
 編集者：東京学芸大学出版会事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学構内
 発行者：東京学芸大学出版会 [E-mail] upress@u-gakugei.ac.jp [Web-site] http://www.u-gakugei.ac.jp/~upress/
 [本号編集担当]：筒石 賢昭(出版会編集長)・黒石 陽子(事務局長)・腰越 滋(Press News担当)

巻頭言： 揺籃期から発展期へ向かう東京学芸大学出版会

筒石 賢昭（出版会編集長 音楽・演劇講座）

すぐれた大学にはすぐれた出版会がある。特に欧米では学術書の刊行は、大学の社会的な使命の一つとして認識されており、民間よりも大学出版会が中心となっている。よく知られている出版会として、ケンブリッジ大学出版会、オックスフォード出版会（元々は英国であるが近年では米国に主力を移している）、ハーバード大学出版会等があげられ歴史的にも学術的にも世界の学界に寄与している。かつて留学していた図書館学で評価の高いイリノイ大学でも、出版会は大学の一組織として重要視され出版物は言うに及ばず、様々な学会誌の編集、出版など我が国では各学会の編集委員会が行っているようなことを出版会が行っていることをうらやましく思ったものである。現在筆者の研究室でもイリノイ大学刊行の「芸術教育ジャーナル」や「音楽教育研究雑誌」を定期的に購入している。またアメリカの大学図書館では出版会のコーナーが設けられており、常時来館者の目にとまるようになっている所が多い。学芸大学の学術協定校の北京師範大学の出版会は中国の教育に貢献している面が出版物や指導書から伝わってくる。南京師範大学を訪問したときも正門の隣に立派な大学の出版会のビルが建っているのを見て驚いたことがある。

日本の大学でも多くの大学で出版会または出版部が設立されている。東京大学出版会は創立55周年を迎え昨年は全国の生協や書店で記念のブックフェアを行った。ユニークな刊行物として京都大学学術出版会では、「学術選書」と銘打ったシリーズを刊行している。昨年は名古屋大学の出版会の地域密着の活動が意義深いものとして朝日新聞で取り上げられた。九州大学出版会は、沖縄・九州・中国の国公私立27大学の共同学術出版会である。旧帝大系で比較的設立が遅かった東北大学出版会は関係者の熱意と東北大学後援会などの支援をうけて1996年11月に発足した東北地方唯一の学術専門の出版社である、この出版会の組織・運用のあり方は「東北大学方式」とよばれ、後発大学出版会の参考ともなっている。私学に目を転じると玉川大学出版部は、1923（大正12）年誕生のイデア書院・玉川学園出版部から起算して、2003（平成15）年には創立80周年を迎え、大型企画として「金田一春彦著作集全12巻」などの刊行を始めている。慶応大学出版会は1947年の創立で、2004年7月現在、資本金4,000万円で社員数46名を抱える「株式会社」となっている。各大学出版会の出版案内は常時大手新聞社の一面に新刊案内を掲載して一般にも目に触れる機会も多い。

大学の出版会の使命は何であろうか。各大学の出版会の設立の目的等を見ると、大学の「知的生産」の成果である学術文化情報を時宜を捉えて広く社会に伝えていくことを基本的な使命としており、さら

(2 ページに続く)

学芸大 Press News

9号 (Vol. 5 No. 1)

目次:

● 巻頭言： 揺籃期から発展期へ向かう東京学芸大学出版会（筒石 賢昭）	1～2面
● 寄稿： 出版会設立5年の節目に～双六、大鵬、ユニセフ募金～（池田 義人）	2～3面
● ご案内： 大学出版部連絡会が設立されました	3～4面
● 新刊行物のご紹介： 双六の復刻	4面
● ご案内：『東京 師範学校生活史研究』好評発売中！ブックレットも好調です！！	4面
● お願い： 出版会会費納入に関して	4面

(1 ページから続く)

に一大学の枠にとらわれず、グローバルな視野に立って、大学における研究成果を社会に貢献することを任務としていることが窺える。その一方で若者の読書離れ、またインターネットで情報のダウンロードが簡単に出来る様になり、その中で出版事業も転機を迎えている。このような状況からも大学出版会に寄せられる期待はまことに大きいと言わなければならない。

さて東京学芸大学に出版会が設立されたのは2001年11月3日であるから、今年ちょうど創立5年をすぎたところである。事務局は正門脇の二十周年記念館の2F 辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）の隣にある。運営に当たって本会は任意団体であり、会員の奉仕活動によって運営されている。要するに会員のボランティアである。会員の出版にかける意欲と情熱以外の何物でもない。予算面の問題もあり事務局は、本務の講義、委員会等の他にこの仕事を行っているので、時間的にも制約が多い。しかしこのような厳しい状況下にあっても、これまで「これからの教育と大学」「キャンパス周辺散策ガイド」「朗読CDおひさまのかげら」「折り紙と算数とコンピュータ」「基礎情報処理」といった著書を出版してきた。また去年は、特記すべきこととして、本格的学術書として教育学講座陣内靖彦先生の労作「東京・師範学校生活史研究」が出版されたことがあげられる。この本については毎週のように問い合わせや注文がある。またブックレット「リベラルアーツ21」の刊行も始まった。第一作目は教育実践研究支援センター小林正幸先生の「不登校はなぜ起こるかー問題解決と予防の手がかり」である。このシリーズでは専門家が高度な内容をわかりやすく解説していく本を刊行することを目指している。その他「大学紹介のDVD」や「美しい東京学芸大学の四季の絵はがき」数編も好調な売れ行きである。

今後は、専門書、教養書、入門書、教科書、学会のプロシーディングス、科学研究費等による出版助成、紀要等などの出版等様々な展開が考えられる。その一つとして大学図書館蔵の「絵双六」の復刻版がまもなく出版される。また「東京学芸大学の森プロジェクト」による新たな絵はがきも予定されている。

以上のように冒頭に述べたすぐれた出版会を育成、維持していくためには、専門家を交えた組織の再構築が急務である。今までのような会員の熱意だけでは、出版会は音楽用語で言うデクレッシェンド化していくことは必至である。揺籃期から発展期へ育つために、あるいは山積する教育課題に答えるために東京学芸大学出版会に対する期待は高まっている。学長や財務担当関係者のリーダーシップと英知を結集して東京学芸大学出版会の発展の時代を築きたいものである。

寄稿： 出版会設立5年の節目に～双六、大鵬、ユニセフ募金～

池田 義人（数学講座）

東京学芸大学附属図書館が所有する双六コレクションの復刻が、大学と辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）および東京学芸大学出版会の3者による協同の事業としてようやく動き始めた。「ようやく」というのは、今年の春から一年近い検討のときがあったからで、それはそれでとても重要であった。おそらくこの稿の載るプレスニュースの発行と同じころ、第一弾の双六復刻版2点が東京学芸大学出版会より発行されている。

国立大学の法人化に伴い各大学は、自らのミッションを明らかにし、少子化の時代における優秀な学生の確保のため、そしてそれはそのまま自らの存亡に直結するためもあって、さまざまな特色を謳い、社会貢献と、資金的にも安定した運営をめざして、新しい事業に積極的に踏み出し始めている。研究室に眠っていた酵母菌を使って古酒の復活を行う大学もあれば、地域のブランド名を活かして牛肉の販売に乗り出している大学もある。

そんななかで、教員養成という、社会にとってはとても重要であるが、どちらかといえば地味な使命を旨とする東京学芸大学には、やれ酒だ、牛肉だ、というわけにはいかない難しさがある。しかし、だからといって手をこまねいて何もしないでいい状況ではない。東京学芸大学には、日本の教育・文化の発展に寄与する、今日の難しい教育課題に対処していく、そのための指導的、先導的な役割を果たす、というための事業展開が始めから求められている。そうした手かせ、足かせのなかで、すべきことを見出し、しかも躊躇することなく行っていくなくてはならないのである。

双六の復刻事業は、そうした状況下においては、とてもタイムリーでふさわしく、思いがけない成果も期待できそうな事業であると考え。ここで「思いがけない成果」と述べる意味はいろいろである。テレビゲームや携帯電話、インターネットなどの登場によりすっかりと様変わりしてしまった観のある子どもたちの世界に、双六はどう映るであろうか。さまざまな価値の交代がめまぐるしいなかで、双六が伝える価値に人々はどう反応するであろうか。時代が進むことによって古いものは捨てられ、新しいものが飛びつくように迎えられるのはいつの世でも変わらない。しかし、温故知新という言葉に込められているように、古いもののなかに潜む教育的な価値までも捨てることは、蓄積された叡智を捨てることにもつながる。双六だけではない。折り紙やけん玉、あやとり、歌留多、こま回しなどいろいろとあるが、いろいろとある昔のよさのなかで双六はひとつの象徴になり得るのではないか、と考えるのである。

象徴という言葉で思い出されるのは「大相撲の大鵬」である。大相撲もある意味で双六と同じで、NHKテレビでは相変わらずの中継が行われているものの、人気という点では往年の比ではなく、主に年配者の視聴に支えられていて、現代の子どもたちの多くにとっては関心外となりつつある。まして「大鵬」を知る子どもたちはど

れほどいることであろう。

かつて、といってもそれほど昔のことではないのであるが、「大鵬」は子どもたちの憧れの的であり、野球の「長島」と並んで、子どもたちにとっては英雄の象徴であった。過日、北海道を旅行したときその「大鵬」のお兄さんと会い、お話を伺う機会を得た。そのお話のなかで、さまざまな教訓を耳にしたが、ひとりの英雄のまわりには、必ずこのお兄さんのように、立派で、しっかりとした人が、影のように寄り添っている、ということの素晴らしさを痛感した。これは教育の根本でもあると思う。教師は子どもたちのために何をしてやるのだろうか。子どもたちにしても、ひとりではひとりのために、何かしてやろうという気持ちを抱いているものだろうか。みんながみんな、自分が、自分だけが、偉くなりたい、金持ちになりたい、と言い出し、競争ばかりしていたら、社会はどのようになっていくであろう。

実はこの危惧は現実のものとなりつつあって、社会のありとあらゆる場所で、自由の名のもとにおけるとてつもなく危険な競争がいま始まっており、たくさん子どもたちがその犠牲となり、親を失ったり、栄養不足から病気になる、死んだりしている。ユニセフ（国際連合児童基金）という組織がこうした状況下における恵まれない子どもたちのための活動を行っているけれども、不幸の連鎖は留まることがない。

思い出していただきたいのは太平洋戦争直後の日本の子どもたちがユニセフにずいぶん助けられているということである。給食のミルクが脱脂粉乳であった時代に育った世代の人ならば必ず思い当たるはずである。いま豊かで、安全な国となり、ユニセフの支援を必要としなくなった日本で、だからこそユニセフの重要性を思い、恩返しの意味からも、この尊い活動に協力したい、しなければならない、と強く思う。このたび双六の事業を出版会とともに行うことを決定し、資金提供を引き受けてくれた辟雍会は、昨年秋における大学のホームカミングデーの際、主要行事として開催された音楽祭で、このユニセフ協会と連携した募金活動を行っている。辟雍会のこの行動は素晴らしい。こうしたささやかな善意の積み重ねが教育を考えるうえにおいてどれほど重要な意味を持つものであるか、大鵬のお兄さんの例を思い合わせて考えてみても明らかである。

昔、「巨人・大鵬・卵焼き」という言葉があった。それを真似るのではないが、「双六・大鵬・ユニセフ募金」という言葉がいまこの文を書いている私の脳裏からなかなか離れてくれない。率直に言って私は大の大鵬ファンであった。今でもあの凛々しい、堂々とした美青年の強い横綱の姿が眼に浮かぶ。相撲は大鵬であり、大鵬でしかあり得なかった。しかし同時に大鵬の好敵手であった柏戸に対する認識も私のなかでは年々改まってきている。大鵬の最も手ごわい敵であって、だからこそ幼い私にとり憎くてしかたなかった柏戸がいまはあゝの意味で大鵬以上に立派に思えてくる。そして大鵬のお兄さんと会い、その薫陶を受けたいまは、柏戸を含めて、大鵬のまわりにて、大鵬を育てたたくさんの人々に対して畏敬の念を覚えるのである。

はやいもので設立して5年目となる東京学芸大学出版会のこれからの歩みを考えるとき、くどい様であるが、やはり「双六、大鵬、ユニセフ募金」だな、と思う。出版会活動を維持していくためにはたくさんの人々の無償の力が必要である。今も、これまでも、少なからぬ人たちの尊い時間がこの出版会活動のために費やされている。さまざまな意味での業績評価が話題となるなかで、自らの学問への影響との間で板ばさみとなって、なおかつ何とか踏みとどまり、出版会を支えようとしてくれている人たちの、善意に溢れた、勇気ある志にはつくづく感服する。こうした状況は、早急に、何とか克服されていかななくてはならないだろう。しかし、極論になるかもしれないが、それでも、一冊の、万人の心に響くいい本を、東京学芸大学出版会として生み出すことができるならば、出版会設立の意義は達成されるのではないか。そのために提供されたたくさんの人のたくさんの犠牲的な時間も報われるのではないか。東京学芸大学出版会の設立に関わりを持った者のひとりとして、いまその責任の大きさを思い、苦勞している人たちの過大な負担に済まなさを感じつつ、少しでも多くの人たちが、東京学芸大学の出版会活動に理解と協力の意思表示をしていただきたい、と願う。東京学芸大学出版会のさらなる発展をこころより希望している。

ご案内： 大学出版部連絡会が設立されました!!

昨年末、新設の大学出版部同士の連携を図る目的で、大学出版部連絡会が設立されました。本学出版会はこの連絡会の中心的なメンバーとして参加することとなり、今後の活動が期待されます。この連絡会設立にあたっては、本出版会初代事務局長の池田 義人先生が呼びかけ人の一人として労をおとりくださり、この連絡会の副代表に就任されています。以下に設立の趣旨をご紹介します。以下に設立の趣旨をご紹介します。

大学出版部連絡会設立の趣旨

大学出版部には一般の出版社とは異なる独自の目的がある。大学所属教員の研究成果の公表助成は教員の業績向上支援のためにも重要であるし、大学の広報としての役割も欠かせない。とりわけ国立大学の法人化に伴い、各大学は大学の研究成果の公開と社会貢献にこれまで以上に積極的であり、こうした方面に大学の予算を使用することも以前より前向きになってきている。また、学術的価値の高い本の出版は大学の地位向上にも役立つものであり、大学で使用する教科書類の出版も教育活動の補助的役割を果たすものと期待される。

しかしながら、こうした目的の達成のために大学出版部が有効であると判っていても、出版そのものには独自な難